「怪傑ゾロ」の研究事始め

加藤　薫

長年、専門領域なる分野での研究を続けていると、実に魅力的な素材だが人生に残された時間に照らし合わせるととても手に負えない、といったものが幾つも溜まってくる。横目でそれらをちらちらと盗み見しながらもわざと興味ないというポーズをとっているのだが、余計気になって仕方がない。誰かが手を着けてくれればあきらめもつく。しかし数十年もほったらかしにされているようだと、やはり自分でやるしかないのかな、という気分で苛立ってくる。私にとって「怪傑ゾロ」はまさにそんな存在であり続けた。いつの間にか資料が増え続けているのだが、ゾロについての思考を巡らす時間は少なくなる一方であり、ここらで自分に責任を負わせる意味でも、すでにわかっていることと、これから調べなければいけないことを一度整理してみようと思う。

あえてこだわることでもないが、筆者はアメリカ文学を専門としている徒ではないから情報ソースは限られているし、文学史的な知識の蓄積があるわけではない。興味を引かれたのはもっぱらゾロの図像表象とそれが意味するもの、キャラクター設定の背後にある「ゾロ」を受け入れた社会や大衆心理にある。一般化すれば仮面をつけて変身するヒーロー（ヒロイン）への大衆の憧れとは何だ，いうことだろうか。筆者の研究領域との関連で言えば、一九世紀後半におけるカリフォルニア住民の状況を語るひとつのリファレンスということにもなろう。しかし現在の問題意識はもう少しはずれたところにある。一言で言えば、アングロサクソン的思考や価値観と、メキシコ（カリフォルニアが長らくスペイン副王領の一部であったことを考えれば当然スペインのものも含まれる）的価値観や文化伝統の、相克と文化変容のインデクスとして使えないかというものだ。

二〇世紀末に実施された国勢調査の結果でも、アメリカ合州国におけるラティーノ系住民数は三五五〇万人を越え、アフリカ系アメリカ人人口と肩を並べるに至っている。このラテイーノ系住民のうち半数以上がメキシコ

系アメリカ人（チカーノ、あるいは「アストランの子孫」という自称の方を好む人も含める）であり、その存在は一八四八年のガダルーペ・イダルゴ条約締結以来、自明のこととなっていたものだ。「怪傑ゾロ」は一九世紀後半にアメリカ合州国サウスウエスト諸地域で発生したアングロ文化とラテン文化の衝突と、その後の同化プロセスの中で生まれ育ったキャラクターであり、異文化融合の象徴として解読可能ではないか、というのが筆者の仮説である。

言うまでもなく「怪傑ゾロ」は架空の人物である。原作者は文芸作家ジョンストン・マッカレー（Johnston McCulley）だが、手元にある「増補改訂　新潮世界文学辞典」（一九九六年版）や「世界人名辞典」（岩波書店　一九九七年）あたりにはまずこの原作者に関する記述がない。大衆冒険小説作家はお呼びではなく、「怪傑ゾロ」の知名度も日本では高いと思うのだが、あまり評価されないらしい。マッカレーは一八八九年イリノイ州生まれ（広瀬順弘訳『怪傑ゾロ』、角川文庫、一九七五年初版、一九九八年改版再版、カバー・データ）らしいが、これより初版の古い『怪傑ゾロ』（井上一夫訳、創元推理文庫、一九六九年初版、一九九八年二四版）の訳者あとがきでは一八八三年オタワ生まれとなっている。まずこの辺りからきちんと調べなければいけないらしい。没年はいずれも不詳である。

ここまで「怪傑ゾロ」という名称を何の定義もなく使ってきたが、この名称はマッカレーの原作〝The Mark of Zorro（ゾロの刻印）〟の邦訳であり、元タイトルよりもキャラクター性を前面に押し出したものだ。但し、発表時の初版タイトルは「カピストラーノの疫病神」（The Curse of Capistrano）であった。この原作の発表年は一九一九年（ジェイムス・ルセーノ原作、奥村章子訳『マスク・オブ・ゾロ』、一九九八年、訳者あとがき）らしいが、前述の広瀬訳本あとがきでは一九二〇年となっている。文芸雑誌で発表後に単行本で出版というプロセスを踏むのはアメリカ合州国の文学世界では普通にあることだから、この一年の差は雑誌発表年と単行本発刊年の差と推察される。この原作は二〇世紀中には世界二十数か国で翻訳され五千万部以上も売れたといわれる（井上、広瀬訳本共に同一の記述）が元データは明らかでない。しかしそれほど大きな間違いや嘘はないだろう。要するに国境を越えて、かなりの読者を魅了した人気ある物語だったということである。

この原作は発表後かなり早い時期に映画化された。猪股勝人編『世界映画名作全史　戦前編』（社会思想社、現代教養文庫、一九八四年）をチェックすると、日本封切

が一九二一年（大正十年）のサイレント映画『奇傑ゾロ』（ユナイテッド・アーチスツ配給、脚本ユージン・ムリン、監督フレッド・ニブロ、主演ダグラス・フェアバンクス）がある。アメリカ国内での上映は一九二〇年となっているから単行本発売とほぼ同時とも言える。LD版（NECアヴェニュー発売、NALA10037,1993年）の小松弘解説に拠ると、かなりのヒット作だったらしい。ちなみに主演のダグラス・フェアバンクスは一九二一年に日本封切された作品だけでも他に『ダグラス大王』（ユナイテッド・アーチスツ配給、脚本・監督ジゴセフ・ヘナベリー）、『三銃士』（ユナイテッド・アーチスツ配給、脚本エドワード・ノブロック、監督フレッド・ニブロ）に出演した程の人気二枚目スターだった。監督ニブロは後に大作「ベン・ハー」を手掛けている。映画『奇傑ゾロ』の時代設定は一八二〇年代になっていた。

この映画のヒットで「数年おきにさまざまなゾロがスクリーンをにぎわし」（前掲書、広瀬訳本、訳者あとがき）、「『ゾロの息子』という続編まで作られた」（前掲書、井上訳、訳者あとがき）という記述があるが、猪股本（同上書）には一切データがない。おそらくそのうちの一本は一九二五年にフェアバンクス主演、監督ドナルド・クリスプで制作された「ドン・Q」（ユナイテッド・アーチスツ）のことであろう。他のバージョンについては日本では未公開ものばっかりだったのだろうか。この点もいずれ調べなければいけないだろう。

広瀬訳本も井上訳本も奥村訳本もニュアンスの違いこそあれ、一九四〇年にゾロの決定版とも言うべきタイロン・パワー主演の映画『怪傑ゾロ』（二十世紀フォックス配給、黒白、脚本ジョン・テインター・フート、監督ルーベン・マムーリアン）が上映され、かなりのヒット作となった、ということを述べている。猪股本に拠ると、日本での初公開は戦後の一九四八年（昭和二三年）となっている。四〇年公開という記述はアメリカ合州国々内でのことだとビデオ版（スタジオ・クラシック社、1988年著作権取得）で確認できた。クレジットを確認すると、この『怪傑ゾロ』の原作原題は「カピストラーノの疫病神」の方を使っている。観た限りでは仮面をつけたゾロの出番は少なく、見せ場である剣劇シーンもゾロの正体であるドン・ディエゴ・デ・ベガのままでの闘いだった。ただ町並み風景や家具、衣装など一九世紀初頭のカリフォルニアの雰囲気が史実に一番忠実に反映された点は秀逸である。

一九六一年七月から日本テレビ系列で三十分のテレビ番組シリーズ『怪傑ゾロ』（ウオルト・デイズニー製作）が放映されていた。この番組の映像や音楽はリアル・タイムで体験している。またこの番組によって主演ガイ・

ウイリアムスの扮するゾロが筆者の視覚イメージの原形となっている。乾直明著「外国テレビフイルム盛衰史」（晶文社、一九九〇年、五六六～五七一頁）をチェックすると、このゾロ・シリーズはアドベンチャー（！）作品として分類されているのに驚く。一九五八年八月にはすでに「ローン・レンジャー」（クレイトン・ムーア主演）はKRT系列（現TBS系）で放映されており、テレビがまだ白黒時代のことゆえゾロの黒い帽子と黒いアイマスクそれに黒マントの衣装に対し、ローン・レンジャーの白の帽子、白い衣装と白い馬というマスクマン同士の対比が印象的だった。しかし「ウイリアム・テル序曲」を編曲した軽快でアップテンポの音楽に乗って、疾走する馬の上から正義の象徴である銀の弾丸を撃つローン・レンジャーに比べ、毎回登場する剣劇シーンに興奮しつつも日本語の主題歌に「…不気味なゼット…」というフレーズがあるように、テレビ番組の「怪傑ゾロ」は全体に「クラサ」があった。おそらく視聴率は今ひとつのものがあっただろう。

一九七五年にはフランス人俳優アラン・ドロン主演の「ゾロ」（伊＝仏合作）が製作された。この映画は舞台を独立運動前後の南米コロンビアに移し、英語の台詞は出てこない。広瀬訳本の訳者あとがきに拠ると、この作品はドロン出演映画五十本記念として製作されたものらしい。

ドロンは一九六四年（昭和三九年）に『黒いチューリップ』（メディテラネ配給、脚本・監督クリスチャン・ジャック）という騎士物で主演しており、日本の観客にもドロン人気と相まって、はまり役ではあった。『黒いチューリップ』の時代設定は一七八九年のフランス革命勃発直前になっている。民衆に味方する貴族出身者という設定や黒いアイマスクの変装衣装など、こちらの「黒いチューリップ」作品の方がマッカレーの原作に近い気がした。ドロンの「ゾロ」では最後の十五分にも及ぶ剣による決闘シーンも注目を浴びた。いずれにせよ、ヨーロッパ製の「ゾロ」ものは今の所、この一本だけである。

手元にあるビデオでは他に一九八一年日本公開のジョージ・ハミルトン主演「ゾロ」（"Zorro, the Gay Blade"二〇世紀フォックス配給、脚本ハル・ドレスナー。監督ピータ・メダック）がある。初代ゾロには双子の息子がおり、遺言でその二人がゾロの遺志を受け継ぐことになったのだが、そのうちの一人はゲイでしかも英国で軍人教育を受けたというコメディー色タップリの設定だった。

一九九八年十月から日本で上映された「マスク・オブ・ゾロ」（トライスター・ピクチャーズ配給、脚本テッド・エリオット、テディー・ロシオ、ランドール・ジョ

ンソン、監督マーチン・キャンベル、製作総指揮ステイーブン・スピルバーグ）は、この映画用原作こそジェイムス・ルセーノ（James Luceno）だが原タイトルからして"The Mask of Zorro"と、マッカレーの原作をもじっており、下敷きとしているのは明らかだ。ルセーノ本の邦訳は一九九八年に「マスク・オブ・ゾロ」（奥村章子訳、ハヤカワ文庫）として出版されている。ちなみにこの奥村訳本の奥付けを見て初めて、ゾロの肖像権や名称の著作権などを株式会社「ゾロ・プロダクション」なる企業組織が所有していることを知った。

第二次世界大戦後の洋画映画の世界ではほぼ十年サイクルで新たな「ゾロ」企画が上程されているわけだが、研究対象となることはなかったようだ。この点はもう少し調査してみなければいけない。以下、今後の研究調査のポイントとなる（と思われる）諸点を順不同で挙げてみる。

奥村訳本の訳者あとがきに拠ると、マッカレーの原作は「フランス革命のさなかに貴族たちを処刑人の手から救出するイギリスの秘密結社〈紅はこべ〉の首領、パーシー・ブレイクニー従男爵」や、カリフォルニアで暴れ回った「実在の盗賊をモデルにしたといわれている」、としている。ハンガリー生まれでイギリスで成功をおさめたエムスカ・オルツィ（Emmuska Orczy）作小説『紅はこべ』が発表されたのは一九〇五年、続作『謎の紅はこべ』の出版が一九〇八年だったので、マッカレーがいわゆる大衆冒険ロマンス小説に分類されるオルツィの本を読んだことは十分に推察されるが、これも調べてみなければ確証はない。またカリフォルニアの盗賊とはおそらくチカーノ史では英雄のように扱われるホアキン・ムリエタのことだろう。「三本指のジャック」（同時期に五人のホアキンという名の犯罪者がいて、伝説はかなり混乱しているのでムリエタのことか確証はまだない）とアングロ白人から呼ばれ、恐れられたこの人物も、元はと言えば、一八五〇年代のまだ十代の頃に、ゴールドラッシュで来たアングロ白人に妻や家族を全員殺され、ホアキンだけが生死の境から生還した事件が発端にある。失くなった指はその後遺症であろう。ホアキンはメキシコ系アメリカ人にとっては義人であり、アングロ白人がラベルとして張った「盗賊」というネガティブなイメージの受け売りはいただけない。

マッカレーがホアキンの伝説に接したことも推察できるが、やはりこれも確証があることなのだろうか。奥村の使用したであろう参照文献（記述なし）も含め調べなければいけない。すでに紹介したように、手元には井上訳と広瀬訳の二冊の「怪傑ゾロ」があり、時代を反映し

てか広瀬本の訳の方が文体にスピード感がある。まあこの種の評論は文学研究者に委せるとしても、気になるのがどちらの訳も、サウスウエスト特有のスペイン語の使い方や含意にはあまり注意を払っていないことだろう。

そもそもゾロとはスペイン語では「ソロ」と撥音し、直訳すれば「キツネ」のことである。マッカレーがどの位スペイン語に堪能であったかは定かでないが、「怪傑ゾロ」の初版本（一九二〇年）のタイトルは「カピストラーノの疫病神」だった。それがゾロに変更されたということは何か理由がありそうだ。マッカレーの作品リストを見ると一九三七年に『ドン・ペオン』というスペイン語タイトルの作品があるが筆者は読んではいない。また映画用の原作も五十本はあるようで（井上本訳者あとがき）その中にはメキシコ人を扱ったようなストーリがあるかも知れない。どちらのチェックも今の所不可能だが、マッカレーの語学能力云々は別としても、カリフォルニアの大衆レベルに残存するスペイン語文化についてある程度の知識があり、英文の地に織り込むことは可能だったと推察できる。

問題はスペイン語文化の中に「ソロ」を勧善懲悪のシンボルに仕立て上げるような起源的土壌があったかどうかである。またそれがイベリア半島のスペイン文化の伝統の中にあって、はるばるとカリフォルニアまで伝えられたものなのか、あるいは新大陸という環境の中で、例えば先住民の伝承や説話の中にすでに存在したものがスペイン人によって引用されたものか、調べなくてはならない。西欧中世以来の騎士道物語の一類型と考えてもそこで「ソロ」と結びつく要素はどこにあるのだろうか、あるいはないと考えた方が自然なのか、まだわからない。

現在のアメリカ大陸各地には確かに動物としてのソロ（キツネ）は存在する。しかし、そもそもコロンブスの到達以前にアメリカ大陸にキツネは存在したのだろうか。ペルー北部で栄えた先住民文化のひとつであるモチェ(Moche)の遺跡から出土した土器に、キツネの頭部を写実的に表現した作品がある。残念なことに一点だけしか見た記憶がなく、出土地や時代考証のデータ類のメモは一切ない。それでも先住民時代にキツネがいたことを立証できる道筋はありそうだ。もし西欧人が別種のキツネを新しく持ち込んだものなら、誰が、いつ、どこで、ということを調べなくてはならないし、在来種であれ新種であれキツネが生物的にどのように分布の輪を広げていった（あるいは縮めていった）のかも知りたい所である。

一九八二年に発行された「アンデスのソロ」（〝El Zorro en los Andes〟'Instituto LAREDO, Cochabamba, Bolivia）は、画家故エドガル・エルナルステーン（Edgar

Ernalsteen)の素描をあしらいながら、アルゼンチン、ボリビア、エクアドル、ペルーに分布するケチュア語を日常的に使っている住民の間で伝えられてきているキツネに関する二八の説話をまとめたもので、スペイン語とケチュア語の対峙訳となっている。ハグア（ジャガー）との交流を示す説話は八編、プマ（ピューマ）との交流を示すものが四編、この他にはテイグレ（タイガー）、鳩、コンドル、犬、鶏、犬、豚、蛙、などとの交流を示すものが各一編づつ収録されている。説話なので時系列に沿って再構成することにはあまり意味がないことだろう。地名や固有名詞などから地域的特色を掴むことは出来るが、その検討過程からキツネのキャラクターを普遍化できるかはまだ定かでない。南米の在来種動物と、明らかに植民地時代以降アメリカ大陸以外の場所から持ち込まれた動物という区分は可能で、それら動物とキツネの間の交流関係から何かを導き出すことは出来そうだ。いずれにしても、各説話の中でキツネの果たす役割とその象徴的な意味の解読という作業が待っているがまだ未着手である。メソアメリカにおけるキツネの説話を集めたような類書は今の所ないようだ。

一七八一年にエル・プエブロ・デ・ヌエストラ・セニョーラ・イ・ラ・レイナ・デ・ロス・アンヘレス(El publo de nuestra señora y la reina de los angeles:現ロサンジェルス市）の砦が創設されて以来、「カリフォルニオ」と呼ばれ大農園・牧場を所有してきたスペイン系リコ（資産家）が一九世紀末に消滅するまでの盛衰史についてはほとんど知られていない。「怪傑ゾロ」の出現の背景として、このまずアングロ・アメリカ人には無視されてきたアメリカ合州国への併合以前のカリフォルニアの歴史を遡ることは必要だろう。最後に美術的な興味から言えば「怪傑ゾロ」のトレードマーク的表象である、眼の周囲だけを覆ったマスクの由来についても調べたいのだが、今の所、手がかりはない。

（了。）

＜参考文献＞

・Ernalsteen, Edgar, El Zorro en los Andes, cuentos de los Qheshwas, Instituto LAREDO, 1982, Cochabamba, Bolivia.

・猪股勝人、世界映画名作全史　戦前編、戦後編、２部、社会思想社、1974年初版。

・乾直明、外国テレビフイルム盛衰史、晶文社、1990年。

・Lucero, James, The Mask of Zorro, 1998.
奥村章子訳「マスク・オブ・ゾロ」、早川書房、1998年。

・McCulley, Johnston, The Mark of Zorro, 1924(底本)、広瀬順弘訳「怪傑ゾロ」、角川書店、1975年初版、1998年改版再版。

井上一夫訳「怪傑ゾロ」、創元社、1969年初版、1998年24版
・Southwest Organizing Project (SWOP) ed., 500 Years of Chicano History, 1991, Albuquerque, New Mexico, USA.

＜ビデオフィルム・LD資料（日本公開年順）＞

・「奇傑ゾロ」、1921年、ユナイテッド・アーチスツ、主演ダグラス・フェアバンクス。
・「怪傑ゾロ」、1948年、20世紀フォックス、主演タイロン・パワー。
・「黒いチューリップ」、1964年、仏＝伊＝西合作、主演アラン・ドロン。
・「アラン・ドロンのゾロ」。1975年、伊＝仏合作、主演アラン・ドロン。
・「ゾロ」、1981年、20世紀フォックス、主演ジョージ・ハミルトン。
・「マスク・オブ・ゾロ」、1998年、ソニー・ピクチャーズエンタテイメント、主演アントニオ・バンデラス／アンソニー・ホプキンス。

タイロン・パワー主演「怪傑ゾロ」のイメージ
（出典：Studio Classic社発売「The Mark of Zorro」VHS ビデオ版カバー、©1968年）